

白雲片片

第十八回

ゆめ たず み 夢を原ね看よ

今回は瀧山靈祐禪師と、弟子の仰山慧寂禪師、香巖智閑禪師が登場する古則を紹介します。この話は、正法眼蔵「神通」に出てきます。

正法眼蔵三百則 第六十一則

挙す、大瀧、一日臥する次いでに、仰山来る。師、乃ち面を転じ壁に向かつて臥す。仰云く、某甲は是れ和尚の弟子なり、形迹を用いざれ。師、起つ勢

を作す。仰、便ち出ず。師、召して寂子と云う。仰、頭を回らす。師云く、老僧が箇の夢を説かんを聴くべし。仰、低頭して聴く勢を作す。師云く、我が為に夢を原ね看よ。仰、一盆の水と一條の手巾を取りて来る。師、遂に洗面し了り、纒かに坐す。香巖入り来る。我れ適来、寂子と一上の神通を作す、小小に同じからず。巖云く、某甲、下面に在りて了りに知り得たり。師云く、子試みに道い看よ。香巖、乃ち一椀の茶を点じ来る。師、嘆じて云く、二子の神通智慧、鶯子、目連にも過ぎたり。」

現代語訳／瀧は瀧山靈祐禪師、仰は仰山慧寂禪師、香は香巖智閑禪師。「挙す」は、昔の祖師の話を取り上げる時に使う言葉です。ある日、瀧山靈祐

禪師が横になつて寝ていた所に仰山慧寂禪師がやつてきました。すると瀧山靈祐禪師は寝返りを打ち、仰山慧寂禪師に背を向け、壁を向いてそのまま横になつていました。

仰「私は和尚さんの弟子です。背中を向けておやすみにならないで下さい。」弟子にそう言われたので、瀧山靈祐禪師は起き上がろうとしました。すると仰山慧寂禪師は師匠の休憩を邪魔してはいけないと思ひ、部屋から出て行こうとしましたが、瀧山靈祐禪師が呼び止めましたので師匠の方を向きました。

瀧「わしが寝ながら見ていた夢の話をしてやろう」

仰山慧寂禪師は師匠に頭を下げて、話を聴こうとしました。ところが、瀧山靈祐禪師は言い直しました。

瀧「わしがどんな夢を見たか、お前が当てるてみる」

すると仰山慧寂禪師は、水が入ったたらいと、一本の手ぬぐいを持って来ました。瀧山靈祐禪師は弟子の持つて来た水と手ぬぐいで顔を洗って拭き、終わってしばらく坐っていました。そこへ香巖智閑禪師が部屋に入つて来ました。瀧山靈祐禪師が香巖智閑禪師に言いました。

瀧「わしは先ほど、弟子の慧寂と一段と

高尚な神秘的な働きを行っていた。

水準の低いものと同じではない。」

徹「私は先ほどから下の方で二人のやり

とりをずっと伺っておりまして。」

瀧「お前が試しに意見を述べてみる。」

すると、香巖智閑禅師は一服のお茶を

立てて持って来ました。

瀧山靈祐禅師は二人の弟子の動作に

感心して言いました。

瀧「お前たち二人の神秘的な動作と直感

的な能力は、釈尊の優れた弟子であつ

た舍利弗（鶻子）と目連に勝るとも劣

らない。」

「神通」という言葉の一般的な解釈を

調べてみますと「どんなことも自由自在

に成し得る、不可思議な働きのこと」と

あります。よくある、超人的な存在が使

う魔法のような力を連想してしまいま

すが、この古則では、日常の中で我々が

行うありふれた行為の意味に使われて

いるようです。

道元禅師は正法眼蔵「神通」の冒頭で、

「かくのごとくなる神通は仏家の茶飯

なり、諸仏いまに懈倦せざるなり」

「神通というのは、仏教徒がお茶を飲ん

だり食事をしたりというふうな日常の

ありふれた動作のことであり、その行為

に対して諸々の祖師は今に至るまで嫌

になつたり飽きたりしていない」と示し

ておられます。

この「懈倦せざるなり」という表現は

大変親切なお言葉だと思えます。道元禅

師のお言葉から察すると、日常の中で繰

り返しているのと嫌になつたり飽きたり

しやすく、ややもすれば、たびたび行う

ことだから雑になつても仕方がない、と

思つてしまうことの中に神通といえる

行為がある、と解釈できます。

私は住職になつて今年で七年目です

が、毎日やっていることといえは庭木の

剪定、草刈り草むしり、会計の処理、諸々

の事務仕事、買い出しなど行事の準備、

檀務、宗門や地域行事への参加、送り迎

えなど子供の世話、親の手伝い……

用事の量が身に余っているのです、まとめ

たり省略したいところなのですが、なか

なかそうもいかず、能力の限界もあつて

か全体的に丁寧にできていません。

「この世に雑用という用はない」、こ

れは大本山総持寺元貫首、板橋興宗禅師

のお言葉です。このお言葉を初めて聞いた

時、よく分からないけど、とにかく強

烈な一言だと感じたのを覚えてます。こ

の一言の中に一体どれだけの教えが含

まれているのか今はまだ分かりませんが、もうすぐ草がスクスクと元気に伸び

る時期がやってきましたので、軍手を着けて

草刈機の整備をし、ガソリンを買つて

きて混合油を作りながら参究したいと思います。

参考文献／駒沢大学編「禅学大辞典」、

西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱上巻二

